

生きもの
博物誌
【ハエ】



博物館の
いたずら虫たち②

和高 智美
(わだか ともみ)

本館プロジェクト研究員

大型はフン害も

ハエ目には、ハエ、アブ、カ、ガガンボなどが含まれ、世界各地に分布し、日本には五〇〇種以上が生息している。わたしたちが日常的に見かける身近な昆虫のグループといえるだろう。いわゆるハエには、イエバエやニクバエなどの大型のハエや小型のシヨウジョウバエがあり、衛生害虫や不快害虫として一般的にはいいイメージがもたれていない。博物館においてハエ目は、資料に穴を開けて卵を生みつけたり、幼虫が資料を食害したりするよつな、直接、資料に害を与える害虫ではないが、イエバエやニクバエのような大型のハエは、フンなどで資料を汚す恐れのある虫として認識されている。

ハエ目は、収蔵庫のように人の出入りが制限されている場所にはほとんどいないが、事務室や作業場などの人の出入りが多いところに集中して見られる。人がドアを開けるとときや、ドアやシャッターの下にあるちよつとした隙間が、虫にとっては大きな通り道になっているのである。

網戸取り替え前とその後

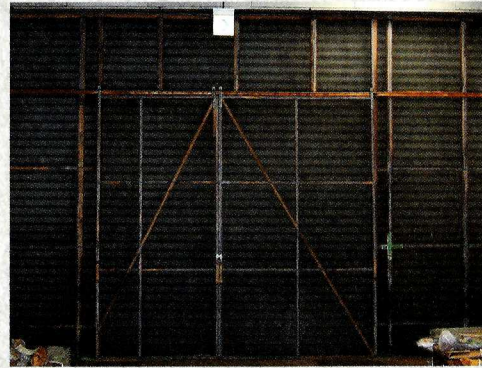
民博で、特にハエ目が多くみられるのは、資料を出し入れする搬入口周辺である。民博の搬入口は、大型のシャッター一枚で外と内を隔てているだけである。そのため、シャッターを開けることによって簡単に虫が建物内

に侵入できる状況となつてしまつてから、かねてから搬入口に網戸を取り付ける防虫対策をおこなつてきた。しかし、当時取り付けた網戸は、木枠に網を貼り付けた簡単な網戸であつたため(写真1)、時間とともに木枠がひずみ、大きな隙間ができていた。また、網戸の建てつけが悪いことから、作業者の防虫に対する意識が弱まり、結果的に網戸が開放されていることが多かった。つまり、防虫のために取り付けた網戸が役割を果たしていなかった。そこで、二〇〇七年二月に網戸の取り替え工事がおこなわれ、現在の金属製のものに交換した(写真2)。

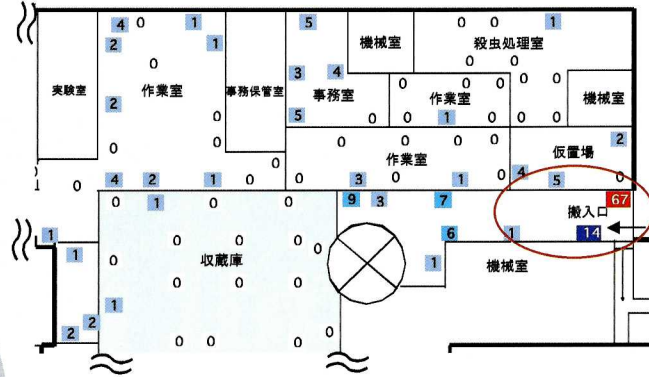
その効果は、生物生息調査の結果に顕著にあらわれている。生物生息調査は、捕虫トラップ(写真3)を館内のいろいろなところに一五日間設置して、そこに捕まつた虫を調べることによつて、どこに、どんな虫が生息しているのかを調査するものである。網戸を取り替えた後の二〇〇七年春の調査結果と、取り替え工事前の同じ季節(二〇〇六年春)の調査結果を比べてみると(図)、搬入口付近でのハエ目の捕獲数が、六七匹から二七匹に減少しており、網戸を取り替えた効果があつたことがわかる。これは、網戸が新しくなつたことによつて、大きな隙間がなくなり、虫が侵入しにくくなつたことと、網戸をあつかいやすくなつたことから作業者が網戸をこまめに開閉して開放している時間が短くなつたことなどが考えられる。

虫の侵入を完全に防ぐことは難しい。民博は、緑豊かな万博記念公園に囲まれた素晴らしい環境にある一方で、建物内に虫が侵入する危険性も高い立地条件といえる。だからこそ、生物生息調査の結果から虫の動向を確認し、その結果を参考に、施設的な改良とともに日常作業の見直しをおこない、ハエ目だけでなく、そのほかの害虫の侵入を未然に防ぐ努力をおこなつていのである。

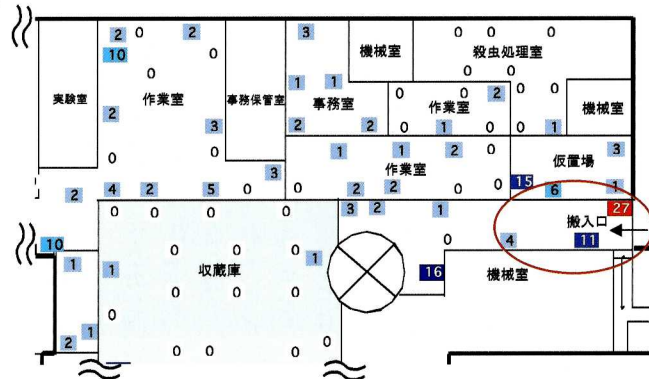
(写真1) 木枠でつくつた、以前の簡易な網戸



(写真2) 現在の金属製網戸



(図) 生物生息調査結果、ハエ目の捕獲結果の一部
(上: 2006年春、下: 2007年春)
捕獲数を色の濃淡であらわすことで、異状値がひと目でわかる。



(写真3) 民博で使用している捕虫トラップ



ハエ目 (学名: Diptera) イエバエ類 (学名: Muscidae)

ハエ目 (Diptera) の成虫は、1対の翅をもつが、これは前翅で、後ろの翅は飛翔中の安定を保つための平均棍(こん)に変化している。イエバエ類は、日本で約250種が確認されており、ハエ目のなかでもっともよく知られている種類である。幼虫は畜舎やゴミ処理場などで発生し、成虫は体長が4~8mmある大型のハエで、家屋内に侵入する性質がある。一般には、病原菌を媒介する衛生害虫として注意されている虫である。



提供: イカリ消毒株式会社